

絵入り 西鶴諸国はなし 一 (表紙)

p 1

世間の広き事国々を見め

ぐりてはなしの種をもとめ

ぬ熊野の奥にハ湯の中にひれ

ふる魚有筑前の国にハひとつを

さし荷ひの大蕪有豊後の大竹

ハ手桶となりわかさの国に弐百余

歳のしろひくにのすめり近江の

国堅田に七尺五寸の大女房も有

丹波に一丈弐尺のから鮭の宮あり

…

松前に百間つゝきの荒和布有阿波

の鳴門に童女のかけ硯あり加賀の

しら山にえんまわうの巾着もあり

信濃の寝覚め床に浦島が火うち

宮ありかまくらに頼朝のこづかひ帳

有都の嵯峨に四十一迄大振袖の女あり

是をおもふに人ハばけもの世にない

物ハなし

p 2

近年諸国咄

大下馬

卷一

目録

① 公事ハ破らずに勝 くらじハやぶらずにかつ 知恵

奈良の寺中にありし事

② 見せぬ所ハ女大工 不思議

京の一条にありし事

③ 大晦月ハあハぬ算用 おふつごもりハあハぬさんやう 義理

江戸の品川にありし事

…

④ 傘の御託宣 慈悲

紀州の掛作にありし事

⑤ 不思議のあし音 音曲

伏見の間屋町にありし事

⑥ 雲中の腕さし 長生

箱根山熊谷にありし事

⑦ 狐の四天王 恨

播州姫路にありし事

p 3

公事ハ破らずに勝

大職冠、さぬきの国房崎の浦にて、竜宮へとられし

玉をとり帰さんために、都の冷人を呼くだし給ひて、く

はんげんありし、唐太鼓ひとつハ、南都東大寺におさめ、またひとつハ西大寺の宝物となりぬ、此太鼓いつの

頃か、西本願寺に渡りて、今に二六時中を、勤めける、昔月そのかみに、

革張替る時、此中を見るに、西大寺の、豊心丹ほうしんたんの方組ほうくみを、

細字にて、書付ありける也、外ハ木をあらハし、中もちもろにハ諸の

羅うん□をさいしき、金銀の置おきあげ、日本たぐひなき名筒也

毎年の興福寺の法事に入事ありて、東大寺の太鼓

…

をかりて、勤められしに、有年東大寺より、太鼓を

かさずして、ことをかきける、衆徒神主の言葉を、当年

計ハと添られ、やうく借りて、仏事を済しぬ、其後使を立れ

ども、太鼓をもどさず、寺中集つて、ひようばんする、数年

借し来つて、今この時に至り、憎きしかた也、只ハかへさじ、打

やぶつてといふ者あれば、それも手ぬるし、飛火野にて

焼と、あまたの若僧、悪僧いさみて、方丈に声ひゝきわた

りて静らず、其中に学頭の、老法師の進出て、今朝方

聞に、倚いつれもの申分皆国土の費也、某が存るにハ、太鼓を

其儘当寺の物になせるく、分別ありと、筒の中に、

p 4

東大寺と、先年よりの、書付を削り、新しき墨にて、元

ごとく、東大寺と書しるし、此事沙汰せず、東大寺に、も

とせば、悦び宝蔵に入置、かさねて出す事なし、明の年また、

興福寺の法事まへに、使僧を遣し、例年の通り預け置

候、太鼓を取に、まいったと申せば、腹立して、使の坊主を、てう

ちやくして帰しける、此事奉行所へ申上れば御詮議にな

つて、太鼓を改めたまふに、名筒を削りて、東大寺との書付しれ

たとへ興福寺からの、仕業にても、越度ハ古代の書付しれ

がたし、自今興福寺の太鼓に極め、先例の通り、置所ハ

東大寺にあづけ、年々入る時を、うちけるとなん

…

見せぬ所ハ女大工

道具箱にハ、錐鉋すミ壺さしかね、顔も三寸の見

直し中びくなる女房、手あしたくましき、大工の上手

にて、世を渡り、一条小反橋に住けると也、都ハ広く、

男の細工人もあるに、女を雇ハるぞ、されば御所方

の奥つばね、忍び帰しのおね、またハ窓の竹うちかへるな

ど、すこしの事に、男ハ吟味をむつかしく、是に仰せ付られけ

ると也、打ふしハ秋もすえの、女郎達案内して、彼の大工を

紅葉の庭にめされて、御寝間の袋棚、えびす大黒殿

迄、急ひで打はなせと、申わたせば、いまだ新しき御座敷を

p 6

こぼち申御事ハと、尋ね奉れば、不思議を立るも断也、

すきにし名月の夜、更行迄奥にも御機嫌よくおハしまし、

御うたゝねの枕ちかく、右丸左丸といふ、二人の腰本ともに、琴

のつれ引、此おもしろさ、座中眠を覚して、あたりを見れ

ば、天井より、四つ手の女、顔ハ乙御前の黒きがごとし、腰

うすびらたく、腹這にして、奥さまのあたりへ、寄と見へし

が、かなしき御声を、あげさせられ、守刀を持って、まいれと

仰けるに、おそばに有し、蔵之助とりに立間に、其面

影消て、御夢物語のおそろし、我うしろ骨と、おもふ所に、大釘をうち込と、おほしめずより、魂きゆるがご

とくならせられしが、されども御身にハ、何の子細もなく、畳にハ血を流して有しを、祇園に阿部の左近といふ、うらなひめして、見せ給ふに、此家内に、わざなすしるしの、有べしと、申によつて、残らず改むる也、用捨なく、そこらもちはずせと、三方の壁計になして、なを明障子迄、はづしても、何の事もなし、心に掛る物ハ是ならでハと、えいざん方御きねんの、札板おろせば、しばしうごくを見て、いづれも、おどろき、壱枚つゝはなして見るに、上より七枚下に、長九寸計の、守、胴骨を金釘にとぢられ、紙程薄なりても活てはたらしきを、其まゝ煙になして、其後ハ何のどがめもなし

大晦日ハあハぬ算用

榧^{かや}かち栗、神の松、やま草の売声もせハしく、餅突

宿の隣に、煤をも拂はず、廿八日迄髭をそらず、朱鞆^{より}の反をかへして、春迄待といふに、是非にまたぬかと、米屋の若ひ者を、にらミつけて、すぐなる今の世を、横にわたる男あり、名ハ原田内助と申て、かくれもなき、牢人、広き江戸にさへ住かね、此四五年、品川の藤茶屋の、あたりに棚かりて、朝の薪にことをかき、夕の油火をも見ず、是ハかなしき年の暮に、女房の兄、半井清庵と申て、神田の明神の横町に、薬師あり、此もとへ、無心の状を遣ハしけるに、度々迷惑

p 8

ながら、見捨てがたく、金子十両包て上書に、ひんびやうの妙薬、金用丸、よろずによしとしるして、内儀のかたへおくられる、内助よろこび、日頃別して語る、浪人中間へ、酒ひとつもらんと、呼に遣し、幸雪の夜のおもしろさ、今迄ハ、くづれ次第の柴の戸を明てさあ是へといふ、以上七人の客、いづれも紙子の袖をつらね、時ならぬ一重羽織、どこやらむかしを忘れず、常の礼儀すぎてから、亭主罷出て、私仕合の合力を請ておもひまゝの正月を、仕ると申せば、をのゝそれハ、あやかり物どいふ、就夫^{それら}上書^{かき}に、一作有と、くだんの小判を出せば、さても

かる口なる御事と、見てまハせば、盃も数かさなりて、能^よ

年忘れ、ことに長座と、千秋楽をうたひ出し、間鍋塩辛

壺を、手ぐりにしてあげさせ、小判も先、御仕舞候へと

集るに、拾両有し内、一兩たらず、座中居なをり、袖など

ふるひ、前後を見れども、いよゝないに極りける、あるじの申ハ

其内一両ハ、去方へ拂ひしに拙者の覚違へといふ、只今迄慥

十両見へしに、めいよの事ぞかし、兎角ハ銘々の身晴と、上座

から帯をとけば、其次も改めける、三人目にありし男、十面

つくつて、物をもいハざりしが、膝立なをし、浮世にハ、かゝる

難儀もあるものかな、それがしハ身ふるふ迄もなし、金

子一兩持合すこそ、因果なれ、思ひもよらぬ事に、一命を

p 9

捨ると、おもひ切て申せば、一座口を揃へて、こなたにかざらず、あさましき身なればとて、小判一兩持まじき物にもあらざと申、いかにも此金子の出所ハ、私持きたりたる、徳乗の小

柄、唐物屋十左衛門かたへ、一両式分に、昨日売候事、まぎれ
ハなければども、おふしわるし、つね／＼語合せたるよしみにハ
生害におよびし跡にて、御尋ねあそばし、かばねの恥
を、せめてハ頼むと、申もあへず、革柄に手を掛る時、小判ハ
是にありと、丸行灯の影より、なげ出ば、扱ハと事を静め、
物にハ、念を入たるがよいといふ時、内証より、内儀声を
立て、小判ハ此方へまいったと、重箱の蓋につけて、

・

座敷へ出されける、是ハ宵に、山の芋の、にしめ物を入れて
出されしが、其ゆげにて、取付けるか、さも有へし、是でハ
小判十一枚になりける、いづれも申されしハ、此金子、ひたもの
数多くなる事、目出しといふ、亭主申ハ、九両の小判、
十両の詮議するに、拾一両になる事、座中金子を持

あハせられ、最前の難儀を、すくハんために、御出しありしハ
うたがひなし、此一両我方に、納むべき用なし、御主へ帰した
しと聞に、誰返事のものもなく、一座いなものになりて、
夜更鶏も、鳴時なれども、おの／＼立かねられしに、此しハ
亭主が、所存の通りに、あそばされて給ハれ、と願しに

p 10

兎角あるじの、心まかせにと、申されければ、彼の小判を
一升桝に入れて、庭の手水鉢の上に置いて、どなたにても
此金子の主、とらせられて、御帰りたまハれと、御客独づ、
立しまして、一度／＼に、戸をさし籠て、七人を七度に出
して、其後内助ハ、手燭ともして見るに誰ともしれず
とつてかへりぬ、あるじ即座の分別、座なれたる客
のしこなし、彼是武士のつきあい、格別ぞかし

p 11

・

傘の御託宣

慈悲の世の中とて、諸人のために、よき事をして置ハ、紀州
掛作の、^{かづくり}観音のかし傘、式拾本也、昔方ある人寄進して、毎
年張替て、此時迄掛置也、いかなる人も、此辺にて雨雪の降
かゝれば、断りなしに、さして帰り、日和の時律儀にかえして、老
本にても、たらぬといふ事なし、慶安式年の春藤代の里
人、此唐傘をかりて、和哥吹上にさし掛りしに玉津島の
かた方、神風どつと、此傘とつて、行えもしらずなるを、惜や
とおもふ甲斐もなし、吹行程に肥後の国の奥山、穴里と
いふ所に落ける、此里ハむかしより、外をしらず住つゝけて、無
p 12

佛の世界ハ広し、^{かしかさ}傘といふ物を、見た事のなければ、驚き
法体老人あつまり、此年迄聞傳へたる、例もなしと申せば、
其中にござかしき男出て、此竹の数を讀に、正く四十本也
紙も常のとハ格別也、かたじけなくも、是ハ名に聞し、日の
神、内宮の御しんたい、爰に飛せ給ふぞと申せば恐をなし、
俄に塩水をうち、荒菰の上になをし、里中山入をして
宮木を引、萱を茹、ほどのふ伊勢うつして、あがめるに

したがひ、此傘に^{かしかさ}性根入、五月雨の時分、社壇^{しゃだん}しきりになり
出て、やむ事なし、御託宣を聞に、此夏中、竈の前をじ
だらくにして、油虫をわかし、内神^{けがら}迄汚ハし、向後国中に

・

一疋も置まし、又ひとつの望ハ、うつくしき娘を、おつら子

にそなふべし、さもなくば、七日が中に車軸をさして、人種ののないやうに、降ころさんとの御事、おの／＼こはやと、談合して、指折の娘どもを集め、それか是かとせんさくする、未

白齒しろはの女泪を流し、いやがるをきけば、我々が命とても

あるべきかと、傘の神姿の、いな所に気をつけて、なげきしに、此里に色よき、後家のありしが、神の御事なれば若ひ人達の、身替に立べしと、宮所に夜もすがら待に

何の情もなしとて、腹立ふくりうして、御殿にかけ入、彼傘かしかさをにぎり、おもへばからだたせし目と、引やぶりて捨てける

p 13
不思議のあし音

唐土もちこしの公治長こうやちやうハ、諸鳥の声をきゝわけ、本朝の安部

の師泰ハ、人の五音を、きく事を得たまへり、此流れとや申べし、爰に伏見の、豊後ばしの片陰に、笹垣をむすび、心をゆく水のごとくにして、世を暮しぬる盲人あり、捨し身のむかし残りて、ただ人とハ見え、つねに

一節へ切ふきて、萬の調子を聞たまふに、違ふ事まれ

なり、又時に、問屋町の北国屋の、二階座敷にて、九月廿三夜の月を、待事ありて、宵より此所の、若ひ者の

集りて、お三寸みき機嫌の、こうた浄瑠璃、日待月まち、何

p 14
国も同じさハぎぞかし、且那山伏の多門院、めでたき

事どもを語れば、あるじうれしさのあまりに、何に

よらず、御遊興を、御好ミ次第、客方より、彼一節かへぎり切を

聞事ならばとの望、亭主ちかずきとて、頓やがて呼寄

ける、先よし野の山を、所望してふく時、茶のかよひ

する小坊主、箱階子をあがるを聞て、油こぼすよと申さ

れける、大事にかけて、油さし持しに、はづし置たる杉

戸こけ掛り、おハぬ怪我をいたしける、おの／＼是ハと、横

手をうつて、只今大道を行者ハ、何人ぞと申せば、足音の

調子を聞合し、是ハ老女の手を引、男ハ物おもひして行

顔つき、足取のせハしき、取揚ばばなるべし、それかと人をつ

けて聞かすに、彼男が申ハ、しきりがまいったら腰ハ我

らでも抱ますが、とてもノ事に、むす子を産ば、仕合と申、大

笑ひして、又其次に通る者を聞に、式人じゃが、独のあし音

と、見せにやれば、下女小娘を負て行、其跡に通るものを

何と聞に、是ハ正しく、鳥類なるが、おのが身を大事がると

いふ、また見に行に、行人鳥足の、高あしだをはきて、道を

しつかに歩行、さても／＼あらそわれぬ事ども也、とても

なくさみに、今一度きゝたまへと、いづれも虫籠をあけて

待に、道筋も見へかね、初夜の鐘のなる時、旅人の

p 15
くたり舟に、乗おくれじといそぐ風情、二階のともし火

に、移りて見るに、一人ハ刀脇指をさして、黒き羽織に、す

げ笠をかづき、今一人ハ挟み箱に酒樽を付て、あとにつゝき

て行、あれをとへば、式人つれ也、式人は女、一人ハ男といふ、宵から

の中に、是計が違ひぬ、我々見とめて、なる程大小迄

さして、侍衆じやと申、いな事や、女にてあるべし、おの／＼の
目違ひハ、なきと申せば、又人を遣ハし、様子を聞せける

に樽持たる下人に少語ハ、夜舟にて、其樽心掛よ、酒にハ

あらず皆銀也、夜道の用心に、かく男の風俗して、大坂へ
買物に行と申、よく／＼聞バ、五条のおかた米屋とかや

p 16

雲中の腕押

元和年中に、大雪ふつて、箱根山の玉笹をうつミて

往來の絶て、十日計も馬も通なし、爰に鳥さへ通ハ

ぬ峯に、庵をむすび、短斎坊といふ、木食ありしが、佛

棚も、世を夢のごとく暮して、百余歳になりぬ、常に

十六むさしを、慰にされけるに、有時奥山二年かさね

たる法師のきたつて、むさしの相手になつて、あそびける

其ありさまを見るに、木葉をつらぬき肩に掛腰にハ

藤づるをまとひ、黒き顔より、眼ひかり、人間とはおもハれ

ず、松の葉をむしり、食物として、物いふ事まれにして、是

p 17

程よき友ハなし、ある夕暮に、焼火にことをかきしに

彼老人こしより、革巾着を取出し、是ハ鞍馬の名

石にて、火の出る事はやしと、判官殿に、もろふたと、

まさ／＼しう語る、短斎おどろき、そなたハいかなる人ぞ、其

時ハひさしき事とへば、我こそ常陸坊梅尊、むかしに

かハる有様といふ、是を思ひあハすに、此人の最後のし

れぬ事を申傳へしが、さてハ不思議と、すぎにし弁慶

ハ色黒くせいたかく、絵にさへおそろしく、見ゆると尋

ければ、それハ大きに違ふた、またなき美僧とかたる

よしつねこそ、丸顔にして、鼻ひくう、向齒ぬけて、やぶ

!

にらミにて、ちゝ見かしらに、横ふとつて、男ぶりハ、ひと

つもとりにへなし、只志が大将で、其外ハ片岡が萬に

しハひ事、忠信ハ大酒くらひ、伊勢の三郎ハ、買掛りを濟

さぬやつ、尼崎渡辺、ふくしまの舟ちん、侍顔して一度も

やらず、熊井太郎ハ、一年中、びくにすぎ、源八兵衛ハ、ぬけ風

の俳諧して、埒の明ぬもの、駿河二郎ハ、めいよな事の、夏ふ

ゆなしに、ふんどし嫌ひ、亀井ハ倚ささしても、小刀細工が

きいた、鈴木つぎのぶハ、棒組にて、一生飛子買ふて暮

す、兼房ハ浄土宗にて、後世願ひ、此外ひとりも、ろくな

者ハ、なかつたとかたる、さてまた、静ハ今に申程の、美

p 18

人かたとへば、いや／＼、十人並にすこしすぐれた、女房を、其時

ハ、判官世盛にて、借錢ハなし、唐織鹿の子の、法度もな

く、明暮京の水で、みかきぬれば、うつくしい、今でも大名

衆の、妾ども、御関所のあらために見るに、其時より

ハ風俗がよいと申て、まだ咄たい事もあれども、皆うそ

のやうにおもやろ、誰ぞ証抛人、ほしやといふ折ふし、柴

の網戸をおとつれ、正しく是に、海尊の御声がしまする、

少御目に掛りたしと内に入、やれなつかしや／＼命なが

らへて、又あふ事のうれし、先御亭坊へ、引あハしま

しよ、是ハ猪俣の小平六とて、むかしのよしミなるが、今ハ

備中の深山に、すまれますが、此たびハきどくの、たづね

なり、自今以後ハ、顔見しられて、互にと申て、夜もす

から、いにしの軍物語、きのふけふのごとく、今に平六、力の
程ハといへば、さのミ替らしと、片肌ぬぐ、常陸坊もう

でまくりして、亀割坂にて、枕引せし事、おもひ出して

さらばうでをしと、兩人まけず、おとらず、三時あまりも

もみあへば、短斉も中に立、両方へ力を付て、かけ声

雲中に、ひびきわたつて、三人ながら姿をうしなひて、此

勝負した人もなし

狐四天王

諸国の女の髪を切、家々のほうろくを破せ、万民を

わづらハせる、大和の源九郎きつねがためにハ姉也、年

ひさしく、播磨の姫路にすみなれて、其身ハ人間のごと

く、八百八疋のけんぞくをつかひ、世間の眉毛おもふまたに読て、

人をなぶる事自由なり、爰に本町筋に、米屋して

門兵衛といふ人、里ばなれの、山陰を通るに、しろき子狐の

集りしに、何心もなく、礫うち掛しに、自然とあたり所

あしく、其まゝむなしくなりぬ、ふびんとばかりおもふて、か

へる、其夜門兵衛が、屋敷の棟に、何百人の女の声して、

p 20

お姫さま、たま〜野あそびましますを、命をとりし者

其まゝハおかじと石をうつ事雨のごとし、白壁窓蓋迄

うちやぶれども、其礫ひとつもなし、家内おどろく、明の日

の昼前に、旅の出家のきたつて、お茶一ふくたまハれと

申されけるに、下女に申付て、まいらせけるに、間もなく

同心らしき、大男二三十人乱れ入て、御たづねの出家を、何

とてかくし置けるぞと、其断り聞入ず、亭主内儀を押へ

て坊主になして後彼出家もともに、尾のある姿を

あらハして、にげかへる、是非もなき仕合なり、又門兵衛が嫁

むすこの門右衛門、北国に行て留守のうちとて、里にかへりて

ありしに、彼門右衛門になりて、四五人つれにてはしりこミ

女房をとらへ、我他国の跡にて、かくし男あらハれたり、命

ハゆるしてと申もあへず、あたまをそられ、身に覺のなき

事ぞと、年月の恨をいふてなげきぬ、おのれ証拠をミ

見せんと、女を引立、はるか山中に行て、五人立ならび

ひとり〜名乗ける、是ハ二階堂の煤助、鳥居越の中三郎

かくれ笠の金丸、にハとり喰の闇太郎、野あらしの鼻長と

て、おさかべ殿の四天王ひとり武者是なりと、形をかへてぞ

うせける、此事門兵衛に行て、ふかくなげくに甲斐なし

また其次日、午の刻に、大きなそうれいをこしらへて

p 21

導の長老はたてんがいをさし掛たまの興ひかりをなし

孫にいはいを持せ、一門白衣の袖をしほり、町衣ハ袴かたき

ぬにて、野墓のおくるけしき、門兵衛親里、五六里はなれ

しが、けハしく人遣し、夜前頓死いたされ候、御なげきあるべしと

すこしも、おそく御しらせ申すなり、すぐに墓へ御こしあれと、此

ありさま哀に煙となし、親類ばかり跡に残り、さても〜

夢の世や、若ひを先に立て、おもしろき事もあるまじ、是

夢の世や、若ひを先に立て、おもしろき事もあるまじ、是

にて法体ましませと、俄坊主になし、姫路にかへれば、門兵衛内儀も姿をかへてありし、様子聞て悔めども、髪ははずしておかし

卷ノ一了

絵入り西鶴諸国はなし 二 (表紙)

p 1

近年諸国咄

大下馬

卷二

目録

①姿の飛乗物

因果

津の国の池田にありし事

②十式人の俄坊主

遊興

紀伊の国あハ島にありし事

③水筋のぬけ道

報(むくひ)

若狭の小浜にありし事

④残物とて金の鍋

仙人

大和の国生駒にありし事

⑤夢路の風車

隠里

飛騨の国の奥山にありし事

⑥楽(たのしみ)の男地蔵

現遊

都北野片町にありし事

⑦神鳴の病中

欲心

信濃の国浅間にありし事

p 2

姿の飛のり物

すがたのとびのりもの

寛永弐年、冬のはしめに、津の国池田の里の東

呉服の宮山、きぬ掛松の下に、新しき女乗物、誰かハ

捨置ける、柴荊童子の見つけて、町の人に語れば、

大勢集りて、戸ざしを明て見るに、都めきたる、

女郎の、廿三なるが、美人といふハ是なるべし、黒髪を

ミだして、すえを金の、ひらもと結をかけ、肌着ハしろく

うへにハ、菊梧きりの地無ぢなしの小袖をかさね、帯ハ小鶴の唐織に

練なりの薄物を被かき、前に時代蒔絵かきの、硯箱いりかやの蓋に、秋

の野をうつせしが、此中このうちに御所落雁いりかや、煎櫃いりかや、さま／＼の菓

子つミで、剃刀かみそりかたし見へける、御かたハ何国、いかなる事

にて、かくお独ハましますぞ、子細を御物語あるべし

古里へおくり帰して、参らすへしと、いろ／＼尋ねけれ

ども、言葉の返しもなし、只さしうつむきて、まし

ます、目つきもおそろしくて、我先にと家にかへりぬ

今宵そのまゝ置なば、狼の浮目を見すべし、里にお

ろして、一夜ハ番をして、朝ハ御代官へ、御断りを申べきと、また山にのぼれば、彼乗物ハ、一里南の、瀬川といふ宿の、砂浜に行ぬ、既に日も暮て、松の風すさまじく、往来の人も絶て、所の馬方四五人、此女郎をしのび行て、うき世

p 3

の事どもを語りつくして、情といへど、取あへずましませば

荒男の無理に、手をさしてなやめる時、左右へ蛇のかしらを出し、男どもに喰付て、身をいためる事、大かたならず、何れも眼くらミ、気をうしなひ、命を不思議にのがれ、其年中ハ、難病にあへり、其後ハのり物、芥川にありともいへり、またハ松の尾の、神前にも見へ、つきの日ハ、丹波の山ちかく行、片時も定めがたし、後にかうつくしき

禿に替り、またハ八十余歳の翁となり、或ハ顔ふたつになし、目鼻のない姥とも成、見る人毎に、同じ形にハあらず、是に恐れて、夜に入里の通ひもなく、世のさま

たげとなりぬ、此事しらぬ旅人、夜道を行に、おもひもよらぬ、乗物の棒、肩をはなれず、奇異の思ひをなしける、されどもすこしも、重からずして、老町計もすぐると、俄に草臥出て、たやすく足を立す、難儀に

あへる、^{くがなわ}陸繩手の、飛乗物と申傳へしハ是なり、慶安年中迄ハありしが、いつとなく絶て、橋本狐川のワたりに、見なれぬ玉火の出しと、里人の語りし

p 4

十二人の俄坊主

およぎならひハ瓢箪に身をまかせて、浮次第に、水

れんの上手となつて、自然の時の、心掛ふかし、折ふし夏海の静に、かだの浦あそびとて、御船をよせられしに、御台所ふねより、御前の通ひ、浪の上を行に、腰よりした計をぬらして、自由する事、畳の上にかへらずして、月代をする人もあれば、中将棋をさすも

あり、あふむ盃をかハし、^{きよくのみ}曲呑するもおかし、曲舞に

のせて、小鼓をうち、またハ風ふりのきよくむき、是さへ奇

妙に詠ながめしに、四五人して、すくりわらを何程か、手毎に

p 5

抱へて、海中に入て出ぬ事二時にあまりて、二王の形を作りて、手足の力身迄を、細繩がらミの細工、是ぞ仏師もおよびがたし、さま／＼御遊興の折から、御舟端に、関口の何がし、豊に遠見して、居られしに、小姓衆に仰せ付られ、御意と言葉を掛て、さゝ浪の中へ

つき落しける、はるか舟にありぬ、いかなる手者も、だますにハと、大笑ひすれとも、すこしも驚ずめしふねに乗うつれば、何とて手もなく、老人ハしつミけるぞと仰せける、少人にあやまりも、あればとぞんじ、左の袂に、しるしを付置のよし、申あぐる

彼者めして、御覧あるに、麻袴より、帷子まで

式三寸つき通し其かすり脇腹かけて、^{むぼらがき}茨摺むぼらがきのこ

とく、ほそき筋のつきしに、御前はじめて、おの／＼横
手をうちぬ前さまに、指添ぬきて、あてしに、その
人さへ覚ねば、まして外よりハ、目にとまらず、はやき
事、日本一の御機嫌、おふねハ浦々めぐれば、家中の
舟ハ、磯にさしつけ、阿波島の、神垣のあたり迄も
荒し、若き人々、酒興せしに、俄に高浪となり
黒雲立かさなり、長十丈あまりの、うハはミの出
鱗ハ風車のごとし、左右の角枯木と見えて

p 6

くハえん吹立、山更にうごくを見て、いづれもさハぎ
けるに、間近くきたりしに、御長刀にて拂ひたまへ
ば、おそれて跡にかへる、大うねりして、小舟ハ天地かへ
してなやみぬ、沖より十式人乗し、小早横切よこま切れに押と

見えしが、蛇蝸うはばみ一息に吞込、身もたへせしが、間もなく跡へ

ぬけて、汀みぎハに流れつきしを見るに、残らず夢中
になつて、かしら髪一筋もなく、十式人つくり坊主
となれり

p 7

水筋のぬけ道

若狭の国小浜といふ所に、獵師の遣ふ、網の糸を商
売して、有徳に世を渡る人あり、越後屋の傳助とて

此湊にかくれなし、年切ねんきりの女子、名をひさと呼て、その

すがた、北国者にハやさしく、心を掛し人、あまたの中
にも、京屋の庄吉とて、都より通ひ商ひせしが、なじ
めば、片里も住家となりて、年を重ねてありしが、
いまだ定まる妻もなし、彼ひさを忍び馴て、すえ／＼
迄の事を、申かハせしに、親方の女房見とがめ、あらけ
なく、せつかんして、兎角ハ形、人なミなるがゆへに、いたづら

p 8

をするなれば目の前に思ひしらせんと、火箸をあか
めて、左の脇顔にさしつけけるに、皮薄なる所やけ
ちミて、女の身にしてハ、此かなしさ大かた、乱気になつて
年月手馴し、鏡台にむかへば、顔おかしくなるを、身
もたへしてなげき、世にながらへても、せんなしとおもひ極
め、心にある事書置して、小浜の海に身をなげけるに
其夜ハ沖波あらく、しかひも行方しれず、ふびんとばか
り申果ける、其頃ハ正保元年二月九日の事なるに
大和の国、秋志野の里に、田畠の要水のために、百姓
集りて、ふるき寺地の跡を切ならして池を掘ける

に、世間よりふかく、土をあぐれども、水筋にあたらぬ
事を悔ミ、鋤鉄のいとまなく、三日二夜ほる程に、水の
蓋と聞えて、車何百輛か引音して、片隅に穴明て
それより、青浪立のぼり、俄に阿波の鳴門のごとく、渦
のまく事、二時あまり、池より水あまりて、国中大雨
の思ひをなし、驚く事かきりなし、明の日水静になつて
見れば、十八九なる者、身をなげしが、岸の茨に寄添
しを哀と引あけ見るに、此里々の女とも見えず、殊
更十月も以前に、身捨しありさま、いと不思議と申

折ふし、二月堂の行に、参詣せし旅人、しばし目を

p 9

とめて、世にハ似たる面影もあるものかな、遠き国

里をへだてしに、越後屋の下女に、そのまゝなるハと

前にまワりて、あらためけるに、木綿きる物に、鹿の子の

ちらし紋、帯ハつねく見つけし、横嶋の黄色にして

胸に守袋、是を明て見るに、善光寺如来の御影

檀得の浄土数珠、書残せし物をあらまし誂に、うたが

ひなく、若狭の事也、是をおもふに、奈良の都へ若狭より

水の通ひありと傳へしが、いにしへより今の世迄、ためし

もなきそと、からだハ其里に埋て、さまく弔ひ、おのく

右の品々を持て、国元にかへりしに、いづれも横手を

・

うつて、此物かたりに哀まして、庄吉萬事捨て、其身を

墨染になして、秋志の里に行て塚のしるしの笹影に

むかしの事ども申つくし、おのづからの草枕、まだ夢もむ

すばぬうちに、火もへし車に、女式人とり乗て、飛くる

を見るに、正しく傳助が女房也、是を押て、焼かねあつるハ

我なれし、ひさが姿の替る事なし、今ぞおもひを

晴らしけるぞと、いふ声ばかりして消ぬ、三月十一日の事

なるに、日も時も違はず、若狭にて、一声さけびて、むなし

くなりけると也

p 10

残る物とて金の鍋

俄に時雨て、生駒の山も見えず、日ハ暮におよび

平野の里へ帰る、木綿買道をいそぎ、むかし業平の

高安かよひの、息つぎの水といふ所迄、やうくはしりつ

きしに、跡より八十あまりの、老人きたつて頼むは、ち

かごろの無心なれども、老足の山道、さりとてハ難儀

なり、しばらく負てたまハれといふ、やすき事ながら

かゝる重荷の折ふしなれば、叶はじと申、いたハりのこゝろ

ざしあらハ、おもくハかゝらじと、鳥のごとく飛乗りて行

に、一里ばかりも過て、松原の陰にて、日和もあがれば、

p 11

老人ひらりとをりて、草刈の程も、おもひやられたり、せ

めてハ、酒ひとつもるべし是へと、見へわたりて、吸筒も

なく、不思議ながら、ちかふよれば、ふき出す息につれ

て、うつくしき手樽ひとつ、あらハれける、何ぞ肴もと、

こがねの小鍋いくつか出しける、是さへ合点のゆかぬに、

とてもの馳(地)走に、酒のあいてをと吹ば、十四五の美女

びわ琴出して、是をかきならし、後にハ付ざしさまく

我を覚おぼへず、酔出ければ、ひやし物とて、時ならぬ瓜みつからを出し

ぬ、此自由極楽のこゝちして、たのしみけるに、彼老人女

の、ひざ枕をして、躰出し時、女小声になつて申ハ、自

・

是なる御かたの、手掛者なるが明暮つきそひて、

気づくしやむ事なし、御目の明ぬうちの、たのしみ

に、かくし妻にあふ事、見ゆるして給ハれと申、言

葉の下より、是も息ふけば、十五六なる若衆を

出し、最前申せしハ、此方と手を引合、そのあたりを

つれ哥うとふてありきしが、後にハひさしく、行方の

つれ哥うとふてありきしが、後にハひさしく、行方の

つれ哥うとふてありきしが、後にハひさしく、行方の

しれず、老人目覚めたらばと、寝かへりのたひくゝに、彼女を待兼つるに、いつとなく立帰り、若衆を、女吞込ければ、老人目覚して、此女を吞こみ、はじめ出せし道具を、かたはしから吞仕舞、金のこなべを、ひとつ残して

p 1 2

是を商人あきびとにとらし、両方ともに、どれになつて、色々

の物語つきて、既に目も、那古の海に入れれば、相生の松風うたひ立に、老人ハ住吉の方へ飛さりぬ、商人ハしばし枕して、夢見しに、花がちれば、餅をつき、蚊屋をたゞめば、月が出、門松もあれば、大踊あり、盆も正月も一度に昼とも夜ともしれず、すこしの間に、よいなぐさミをして、残る物とて鍋ひとつ、里にかへりて、此事を語れば、生馬仙人しきうばといふ者、毎日住吉より生駒にかよふと申傳へし、それなるべし

p 1 3

夢路の風車

世にハめいよなる事あり、飛驒の国の奥山に、むかしより隠れ里のありしを、所の人もしらず、有時山人の道もなき草木をわけ入を、奉行見付て、跡をしたひ行に、鳥もかよハぬ峰を越、谷あい三里程もすぎて、おそろしき岩穴あり、彼山人是に入れる、のぞけば只くろふして、下にハ

清水の流れ青し、目馴なれし金魚多し、我是迄来

て、此中見届みとずにかへるも、侍の道にハあらずと、おもひ

定め、四五丁くらるとおもひしが、唐門階きざはし、五色の玉をまき

すて、喜見城きけんじょうのとハ、今こそ見れ、是なるべし、折ふしハ冬山を

p 1 4

分のぼり、落葉の霜をふみてきたりしに爰の景色ハはる

なれや、鶯雲雀の轉りて、生鳥賊いかさハラ売声、おのづ

からのとやかに、しばし詠ながめけるうちに、眠り出ねむくて、是なる

草枕して、前後もしらず、かり寝する、其夢こゝちに

女の商人ふたり来て、跡やまくらに立寄、我を頼て申ハ、

はづかしながら、かゝる面影をまみへ申也、ミずからハ、此都のかたはらに、縞絹を織て、世をワたりしに、何にふそくなる事もなかりしに、つれたる人、風のこゝちとて、かりそめのわづらひ、やむ事なく、最後の形見に、織りためし絹、式千疋たまハリ、子もなひ者の事なれば、是を売て、とし

..

月をおくりて、すえくハ出家にもなれとの、名残の言葉

にまかせ、爰かしこの市に立て、渡世とす、いまた一年も立さりしに、我に執心の文を遣しける、おもひもよらぬ事也、

其男ハ、谷鉄と申て、此国に住し大力也、其後ふミの

かへしをせぬ事をうらミ、ある夜しのび入、ふたりのものを切ころし、たくハへ置しきぬ袖をとりてかへり、しがひハ野末埋ミける、此事せんさくあそばしけるに、しれずして今に谷鉄をハ浮世に置事の口惜や、ことに執心と申せしハいつハリ也、只きぬを取べき、はかり事なり、あハれ国王へ

申あけられがたきをとつてたまはれと、女の首両方

p 15

より、袖にすがりてなげく、それこそやすき事なれども

何をかするべに、申あぐべきたよりもなしと申せば、それに

こそ、証拠あれと、念ごろに語る、是より南にあたって、広野

あり、つねハ木も草もなき所也、我等を堀埋し後に

二またの玉柳のはへしなり、是しるしに頼むとの言葉

もつゝ絶へて、夢ハ覚ける、不思議とおもひ彼野にゆけば、

其里人集り、今迄ハ見なれぬ柳とおどろく、さてハと

此事国王に申あぐれば、あまたの人を遣し、彼地を堀せ

見たまふに、夢にたがはず、女式人むかし姿かへらず、くび

おとしてありける、あらしそうもん仕れば、谷鉄やてつが住

。

家に、大勢ミたれ入てからめ取、おのれが身より出ぬるさび

なればと鉄の串さしにして、ちまたにさらしたまへ

り、其後彼さむらいにハ、御ほうびとて、目なれぬから

織の、縞きぬかずくたまはりて、汝此国にてハ命ミ

ぢかし、いそひで古里にかへれと、くれないの風車に乗

られ、浮雲とりまきて目ふる間に、すみなれし国に

かへり、ありのまゝに申せば、其所をさがし出せと、数百人

山入して、谷峯たつね見れども、今にしれがたし

p 16

男地藏

北野のかた脇に、合羽のこはぜをして、其日をおくり、一生

夢のこどく、草庵に独住ひとりすまあり、都なれば、萬の

慰ミ事もあるに、此男ハいまだ、西ひがしをもしらぬ程の

娘の子を集め、すける持あそび物をこしらへ、是にうちま

じりて何のつみもなく、明暮たのしむに、後にハ新さい

の川原と名付て、五町三町の子供、爰にあつまり、父母

をもたづねず、あそべバ親どもよろこび、佛のやうにぞ申け

る、其後此男夜に入月影をしのび、京中にゆきて、うつくし

き娘を盗て二三日もあいしてハ、又帰しぬ、是を不思議の

p 17

沙汰して暮より用心して、いとけなき娘を門かどに出す、都

のさハぎ大かたならず、きのふハ六条の、数珠屋の子が見えぬ

とて、なげき、けふハ新町の、椀屋の子をたづねかなしむぞ

かし、此ハ軒端に、菖蒲葺五月の節句の色めける、室町通

の、菊屋の何がしのひとり娘、今七才にて、其さますぐれて、生

れつきしに、乳母腰本がつきて、入日をよける傘さしかけて

行を見すまし、横取にして、抱てにぐるを、それくど声を

たつるに、追かくる人もはや、形を見うしなひける、此男の

足のはやく事、京方伊勢へ、一日に下向するなれば、跡につく

べき事、およびがたし、其面影を見し人のいふハ、先菅笠ますすげがき

を着て、耳のながき女と見るもあり、いや顔の黒き、目の

ひとつあるものと、とりく姿を見替ぬ、彼娘の親、いろく

なげき、らくちうをさがしけるに、自然と聞出し、彼子を

取かへし、此事を言上申せば、めしよせられて、おもふ所を、御聞

あそばしけるに、只何となく、ちいさき娘を見てハ、其まに

ほしき心の出来、今迄何百人かぬすみて帰りもの三日ハ

あいして、また親本へ帰し申のよし外のしさいもなし、か

る事のありしに、今迄世間にしれぬハ、流石都の大やうなる事おもひしられる

p 18

神鳴の病中

欲にハ一門兄弟の中も、見すつる事、世のならひぞかし信濃の国、浅間の麓に、松田藤五郎と申て、所ひさしき里人のありしが、今年八十八才にして、浮世に何をか、思

ひ残す事もなく、末期まつごのちかづく時、藤六藤七、二人の子を

枕に、我相果の後、摺糠すりぬかの灰迄も、ふたつに分けてとる

べし、さてまた此刀ハ、めいよの命をたすかり、此年迄世に住事の出度、此家の宝物となれば、たとへ牛ハ売とも

是をはなつ事なかれと、念頃に申置れて、ついに佛

の国へまいられけるに、いまだ七日も、立やたゞずに、はや

p 19

跡式をあらそひ、諸道具両方へわけとる、くだんの刀をバ

兄も弟も心掛て、論ずる事の見くるしさに、親類立

あい、兎角惣領なれば、此一腰ハ藤六に渡せと、いろ／＼に

申せど、弟ハさらに合点をせず、兄ハ是非にとらねバきららず

いづれもあつかひに、日を暮らしぬ、藤六申ハふたつに分たる

家を皆藤七に、とらすべしと申せば、やう／＼あつかい噺あつかい済あつかいて、藤六ハ刀

ばかりとつて家を出、向後百姓をやめると、それ方はる／＼の

都みやこにのぼり、目利めききへ行て、是を見するに、奈良物にして

然も焼刃も、かつてなれば、重て人手にもとらねば、また古里に帰り、母親のかたに行て、刀の様子を、たづねける

…
にかたりけるハ其むかし国中百日の日照、ふけ

田も、ひかたとなつて、村々水論もありし時、隣里の男を、親仁切付られしに、しぶり皮もむけず、あやうき命を

たすかられし也、其時此刀の、きれぬをよろこび、命の親とて一代家の宝物とハ、申されける、はしめより無銘の何の

役にも、たゞざる物とハ、かくれもなきに、其方が萬に替てもほしがる事の不思議也、然も水論ハ、正保年中、六月

はじめづかたの事なるに、両村の大勢、千貫樋にむらがり庄屋とし寄、一命を捨て、あらそひして、今ぞあぶなき

折ふし、日の照最中に、ひとつの太鼓なり、黒雲まい

p 20

さがつて、赤ふとしをかきたる、火神鳴ひかみなりの来て、里人に

申ハ先しづまつて聞たまへ、ひさしく雨をふらさずして

かく里々の、難儀ハ我々中間ちゆうまの業也、此程ハ水神鳴みずかみなり

ども、若げにて、夜ばい星に多ハふれ、あたら水を□らして、おもひながらの日照也、おの／＼手作の、牛蒡をおく

られたらば、追付雨を請合と申、それこそやすき事なれと、あまた遣しけるに、竜の駒に壱駄つけて、天上して

其明の日より、はやしるしを見せて、はらり／＼と床落しやうらち

けなる、雨をふらしけるとぞ

卷ノ 二 了

絵入り西鶴諸国はなし 三 (表紙)

p 1

近年諸国咄

大下馬

卷三

目録

① 蚤の籠ぬけ

武勇

駿河の国府中にありし事

② 面影の焼残

無常

京上長者町にありし事

③ お霜月の作髭

馬鹿

大坂玉造にありし事

④ 紫女

夢人

筑前の国はかたにありし事

⑤ 行末の宝舟

無分別

諏訪の水海にありし事

⑥ 八畳敷の蓮葉

名僧

吉野の奥山にありし事

⑦ 因果のぬけ穴

敵打

但馬の国片里にありし事

p 2

蚤の籠ぬけ

富士嵐おろしのさハがしく、府中の町も、用心時のとしの暮

になりぬ、世をワたる萬の事もふそくなく、武道具

もむかしを捨ず、曆々の牢人、津河隼人と申せしが、いかな

る思ひ入にや、下人なしに只独、すこしの板びさしを借て

住けるに、十二月十八日の夜半に、盗人大勢しのび入しに、

夢覚枕刀をぬき合せ四五人も切立おちらし、何にて

も物ハとられず、沙汰なしにして、近所も起さず済しぬ

其夜また、同じ町はづれの紺屋に夜盗入て、家をあら

し、染絹かけ硯をとりて行に、亭主鑓の鞆はづし

て出合けるに、七八人もとりまき、あるじを切こかし思ふ

ま、諸道具迄を取て行、夜明ての御せんぎに、下々の申ハ

皆髭男の大小を指てまいったといふ、かゝる折ふし彼牢

人の門に、血の流れたる、世間より申立、さま／＼の申分

其証拠もなければバ、是非なく籠者ろうしやしてありける、昔ハ

いかなる者ぞと、御たづねあるに、此身になつて名ハなしと、

うち笑つて申何ともむつかしき詮議にて、年月をかさね

七年過て、駿河の籠者ろうしやのこらず、東都の籠ろうに引るゝ

事あり、又此うちにまじり、都のうきすまひ、武運の
つきなり、あまた人ハあれども、其身に科を覺て、今更
p 3

公儀をうらミス、命を惜まず、ある雨中に、くろがねの
窓より、幽かすかなる明りをうけ、蛤の貝にて髭をぬくも

あり、散紙ちりかみにて佛をつくるもあり、色々げいづくし、独
もどんなる者ハなし、其中に髪しろくまきあがり、さな

がら仙人のごとくなるが、薄縁うすべりの糸にて、細工むしごに虫籠をこ

しらへ、此うちに十三年になる虱、九年の蚤なる是を
あいて、食物にハ、我ふともゝを喰しける程に、すぐれて
大きになり、やさしくもなつきて、其者の声に、虱ハ獅子
踊をする、蚤ハ籠ぬけする、かなしき中にも、おかし

さ、まさりぬ、後ハ石川五右衛門より、伝受ひるめすまの昼盗ひるぬすまの大事

またハ、高名咄たわぶになつて、ちよろりの新吉といふ男に
片耳のない、子細を聞人に語るハ、我けハしき事に

出合しハ、四十三度、一たびも手をおはざりしに、有時に
駿河にて、牢人かたへ押込しに、手ばしかく切立、ミなく
命をやう／＼拾ふ、一代に是程にすかぬめにあいつる事ハなし
それにもこりず、其夜染物屋へ入て、あるじを切ころし
と、ありのまゝに語るを聞て、我こそ其牢人の隼人と
申者そ、其方どの仕業、我難儀となる也、かゝる身
となりて、さら／＼命をおしむにハあらず、侍の悪名とつ

て、相果の事のくちおし、何とぞ此難の晴るやうに

p 4

と申ければ、盗人きゝわけ、我々ハそのミならず、此
度ハ、女をころしての科、彼是のがるゝ事なし、御身

の事、御訴訟申さんと、籠番ろうばんを頼ミ、両人あらましを

申あげれば、ひさしく済まざる事の埒明、牢人を

めされ、なが／＼の難儀の段おほしめし、何にても望ミ
を、かなへくださるべき、仰せなり、牢人ありがたく存

然ハ此二人が命を申請たし、最前ハかれらゆへの難に
あい候へとも、此たびの申分にて武士の名を埋まぬ事
のうれしき、かさね／＼言上申、**た**すけけると也

p 5

面影の焼残り おもかげのやけのこり

東山の花に暮し、広沢の月に明し、浮世のかなしき事
をしらず、上長者町に酒つくり込、春夏ハ隙なる、たのし

屋有、ひさしく子を願ひしに、娘一人もふけて、乳娼ちちうばをとりて

そだてしに、今十四歳になりしが、いづれも難いふべき事も

なき、美女なれば、諸人の思ひ入も深かるべし、母の親の才覚
にて、おそからぬ事を取りそぎ、縁付の手道具迄も、残所

もなく拵へ、あなたこなたの云入いひいれも合点せず、都の花をと、聾

見競し折ふし、風のこゝちと、なやミけるに、京中の薬師
に掛て、さま／＼かんひやうすれども、甲斐なく、惜や眠がご

p 6

とく、世をさりける、二親のなげき限もなし、其日も

暮て、ひそかに野辺のおくりをして、千本のミつ鐘に、無常
覺て、煙をかくる時、下々の女迄も、同じ火に飛入ばかりの
思ひをなして帰るに、春の闇さへつらきに、雨のふり出て

殊に哀あはれを残す、其夜の明方、七つの時取をして炭はいよせ奇に

行に、乳まいらせたる娼が男、わが宿よりすぐに、人よりも
はやく、墓原に行に、道すがら人も見へず、三月廿七日の空
宵の景色より、なを物すごく、焼場に行ば、何とも見分

がたき形、あしもとへ踏当、是ハとおどろき、燃さしをあげ
て見れば、死人ハうたがひなし、いかなる亡者ぞと、念仏申

…

さて娘御の、火葬を見るに、早桶たきぐの外へ、こけて
出けるに、気をつけ彼の死人を見れば、髪かしらハ焼けても

風情ハかハラかすかず、いまだ幽かすかに、息づかひのあれば、木の葉のし

ずくを口にそゞぎ、我一重をぬぎて、きせまいらせ、跡へハよ

その、齒骨を入置て、それより負たてまつり、土手町の
借屋敷に行て、年頃目をかけし者をたゞきおこし、忍び

て養生をする、病人と申、一間なるところへたて込、夜明て見る
に、惣身黒木のごとし、二たび人間にハなりがたきありさま

なれども、脉みやくにたのミあれば、不断のいじゃを、よびに遣し、はじ

めを語りて、しのびくに薬をもれば、次第に目をあき、足
p 7

手をうごかし、じねんに見ぐるしき事もやみぬ、半年も
すぎて様子をきけども、かつて物をいはねば、現の人にあへる

ごとし、是ハ薬師も合点ゆかず、取なハしても見給へと

安部の何がしをよびて、八卦を見るに、此人何程くすり
つくしたまふとも、聞事さらにあるまじ、子細ハ親類中
うき世になき人の弔ひ事をしたまふゆへぞと、見通す様

にぞ申ける、今ハかくして叶ハじと、長者町に行て、二親
に段々、此事をかたれば、夢の覺たるこちして、たとへ
姿ハともあれ命さへ世にあらば、うれしさ是ぞと、俄に
仏壇のいはいをくだき、仏事をやめて、精進を魚類

…

にひき替て、祝言にいさ見をなせば、たちまち其日

より、物をいひ出し、此程の恥をかなしミ、親達のなげき
を思ひやり、萬の心ざし、常にたがふ事なし、我無事

すえくハ、出家になしてと、一筋におもひ定め、其後ハ親
にも、一門にもあはず、かくて三年もすぎて、むかしに替らず

美女となりて、つねく願ひ通り、十七の十月より、身
を墨染の衣になし嵐山の近なる里に、ひとつ

庵をむすび、後の世をねがひける、またためしもなき

よミがへりぞかし
p 8

お霜月の作り髭

大上戸の同行四人いつとても諸白もろはく、式斗切に吞ほし

ける、此お寄坊主、はじめの程ハ、雫も嫌ハれしが、人々に
進められて、もろくの盃をふり捨て、阿波の大鳴門小

鳴門と名付て渦まく酒をよるこぶ、いづれも子共に、世をわた
し、手にふそくもなければ、何かおもひ残する事もなし

楽ミハ吞死と定め、折ふし、十月廿八日今宵お取越

とて、殊勝にお文をいただき、ありがたきお談合に、泪を流し、跡ハれいの大酒になつて、前後をしらず、小哥まじりに、なぐさミける、其次の間に近所の若ひ者ども

p 9

親仁達の、さハぎおかしがり、是を聞寝入にして、居中に其夜更けてから、沙汰なしに聳入をする男ありしがうれし顔に、内にもいられず、爰に其時分を、待合す

を、彼法師の見つけて、此男めハ、今晚聳入をする

兼てきいたり、先の娘のうつくしさ、むかしの浄瑠璃御前も及ぶまじ、にくやあいつめが、御ぞうしやうに、髪さかやきをすまして、よばぬさきから、女房じまんなる顔つきに、さらばいわうて、釣髭と、墨すり筆に染て物の見事に作りければ、年寄ども、其筆をばいあいて、

我もく〜とつくる程に、顔ひとつ、手習のごとく書よこし

ける、其後けハしく、宿にかへり、袴きる迄も、人の気も

つかず、其姿にて、聳入せしに、先にて興を覚し、指添を

さげて、かけ出を、しうと留めて、申ハ、此上ハおの〜かんになあそばしても、我等きかず、もはや百年目と、死出立になり

て行を、両町き〜つけ、さま〜に噎へども、きかざれば、やう〜四

人につくり髭をさせ、かしらにひきさき紙をつけ、上下を

ちやくし、日中に詫言、よいとしをして、孫子のある者共

めんぼくなけれど、しなれぬ命なれば、是非もなき事也

中にもすぐれて、おかしきハ御坊の上髭ぞかし

p 10

紫女 むらさきおんな

筑前の国袖の湊といふ所ハ、むかし読める、本哥に替り今ハ人家となつて、肴棚見え渡りける、磯くさき風をも

嫌ひ、常精進に身をかため、佛の道の、あたりがたき事に

おもひ入、三十歳迄妻をも持はず、世間向ハ武道を立、内証ハ出家ころに、不断座敷をはなれ、松柏の年ふりて、深山のごとくなる奥に、一間四西の閑居をこしらへ、定家机にかゝり、二十一代集を、明暮うつしけるに、折ふしハ冬のはじめ

時雨の亭のいにしへを思ふに、物の淋しき突揚窓より

やさしき声をして、伊織様と名をよぶ、女の来たる所にあ

p 11

らねは、不思議ながら有様を見れば、いまだ脇あけしきぬの色、紫を揃へて、さばき髪をまん中にて

金紙に引むすび、此うつくしき事、何ともたとへがたし、是を見るに、年月の心さしを忘れ、只夢のやうになつて

う〜つをぬかしけるに、此女袖より、内裏はこいたをとり出して、独はねをつきしに、それハよめ突かと申せば、男も

もたぬ身を、姫とハ人の名を立給ふと、切戸おし明て

はしり入り、誰でもさハつたらつめる程にと、しどけな

き寝姿、自然と、後むすびの帯とけて、紅井の二

のもの、ほんかに見え、ほそ目になつて、枕といふ物

ほしや、それがなくば、情しる人の膝がかりたい迄、あたり
に見る人ハなし、今なる鐘ハ九ツなれば、夜もふかし
といふ、いやといハれぬ首尾、俄に身をもだへて、いかなる
御かたと、尋ねもせず、若盛のおもひ出、はや曙の別れ
を惜み、さらばと出て行を、まぼろしのごとく、かなしく
又の夜になる事を待兼、人にハ語らず、契を籠て

いまだ廿日もたゝぬに、我ハ覺ず、次第にやするを、念
頃なるくすしのとがめて、脉を見るに、おもふにたがハず
いんきよくハどうの、氣色きしよくに極まり、さりとハ頼たのすく

なき身上なり、日頃ハたしなミ深く、見へたまふが、扱ハ
p 12

かくし女のあるかと、尋ねければ、さやう／＼さやうの事ハ、な
きと申されける、我にしらせ給ハぬハ不覺ふかく也、命の

程もせまるなり、つね／＼別して語り、そのまゝに見
捨て、ころしけると、世のとり沙汰もめいわく也、今より
御出入申まじきと、立行を留め何をかくし申べし

と、段々はしめを咄せバ、道庵しばしかんがへ、是ぞ世に
傳へし、紫女といふ者なるべし、是におもひつかるゝこ

そ、因果なれ、人の血を吸、一命をとりし事ためし有
兎角ハ此女を切たまへ、さもなくてハやむ事なし、又
養生のたよりもなしと、すゝめければ、伊織おど

ろき、おろかなる心を取なせし、いかにも／＼、しるべも
なき、美女のかよふハおそろし、是非今宵、うちと

めんと、油断なく待所へ、袖を顔に押当さても／＼

此程の御情に引かへられ、我をきりたまハんとの
御心入、うらめしやと、近寄を、ぬきうちにしたゝミかく

れば、其まゝ消かゝる、面影をしたひ行に、橋山たかはなのは

るか、木深こぶかき洞穴ほらあなに入れる、其後も心を残し、あさま

しき形見へければ、国中の道心どうしんじや者あつめて、弔ひ

けるに、影消て伊織も、あやうき命を

p 13

行末の宝舟

人間程物のあぶなき事を、かまハぬものなし、信濃の国
諏訪の湖に、毎年氷の橋かかつて、狐のわたりそめて

其跡ハ人馬ともに、自由にかよひを、する事ぞかし、春
また、きつねの渡りかへると、そのまゝ氷とけて、往来

をとめけるに、此里のあばれ者、根引の勘内といふ馬
かた、まハれば遠しと、人の留るにもかまはず、我こころ

ひとつに渡りけるに、まん中すぎ程になりて、俄に風
あたゝかく吹て、跡先より氷消て、浪のしたにぞしつミける

此事かくれもなく、哀と申はてぬ、同し年の七月七日

p 14

の暮に、星を祭るとて梶の葉に哥をかきて、水海に

流しあそぶ時、沖のかたより、ひかりかがやく舟に、見なれ
ぬ人あまた、取乗ける、其中に勘内、高き玉座に居て、

其ゆゝしき、むかしに引替、皆々見違へける、舟より心
静にあがり、前につかハれし、親方のもとに行バ、いづれも

おどろき、様子聞に、それがし只今ハ、竜の中都に、流れ行
て、大王の買物づかひになりて、金銀我まゝにつかまつると、
金銭貳貫くれける、さて爰元より、米もやすし、鳥肴
ハ手とらへにする、女房ハより取、旅芝居の若衆もくる
はやり哥の、やるかしなの、雪国をうたひあかして、さむ

ひともしも、ひだるひともしらず、正月も盆も、爰とすこ

しも、違ふた事なし、十四日から燈籠も出して、爰

と替たるハ、借錢乞といふ者をしらぬと申、此七月ハ我
はじめての盆なれば、ひとしほ馳走のために、国中の

色よき娘、十四より廿五迄いまだ男を持たぬをすぐりて

大踊のこしらへ、それハくまたあるましき事也、其用意

の買物にまいつたと申、めしつれし者ども、何とやう磯く

さく、かしら魚の尾なるもあり、螺のやうなるも有、萬の

買物をもたせ出行時、あの国の女の、いたづらを皆々、見せま

したい事じゃといふ、それハなる事かといへば、それがしのまゝ

p 15

なり、十月計の隙入にして御越あれ、しろかね銭を、ふねに

一ぱいつミで、まいらせんと申せば、我はつねくのよしミ、人よりハ

念頃したと、行事をあらそひける、親方をはじめその

中で、七人伴ひける、取残されし人、是をなげきしに

耳にも聞いれずくだんの玉船にのりさまに、耆人分別

して、命に替る程の、用のありとてゆかず、さらばく頓と

いふまもなく、舟ハ浪間に深ミ、それより十とせあまりも過

ゆけど、たよりもなく、踊を見にと哥にばかりうとふて
果ぬ、此六人の後家のなげき、又耆人ゆかぬ人ハ、今に命の
ながく、目安書して、世を渡りけると也

p 16

八畳敷の蓮の葉

五月雨のふりつづき、吉野川もわたり絶て、つねさへ山家

ハ物の淋しやと、むかし西行の住たまひし、こけしミず

の跡をむすひ、殊勝なる道心者のましますが、所の人

爰に集りて、せんじ茶に、日を暮らしぬるに、雨しきりに、

俄にやまも見えぬ折ふし、板縁のかた隅に、ふるき茶

碓のありしが、其しん木の穴より、長七寸計の、細蛇の

一筋出て、間もなく花柚の枝に、飛うつりて、のぼると

見えしが、雲にかくれて、行方しらず、麓の里より、人

大勢かけ付て、只今此庭から、十丈あまりの、竜か天

p 17

上したと申、此声におどろき、外に出て見るに、門前に

大木の、榎の木もありしが、一の枝引さけ、其下ほれ

て、池のごとくなりぬ、さてもく大きな事やと、人

々のさハぐを、法師うち笑つて、おのく広き世界

を、見ぬゆへ也、我筑前にありし時、さし荷ひの大蕪

菜あり、又雲州の松江川に、横はく一尺式寸づの鮒

あり、近江の長柄山より、九間ある山の芋、ほり出せ

し事も有、竹が嶋の竹ハ、其まゝ手桶に切ぬ、熊野
に油壺を引蟻あり、松前に、一里半つづきたる、こんぶ
あり、つしまの嶋山に、髭一丈のばしたる、老人あり、遠

・
国を見ねバ、合点のゆかぬ物ぞかし、むかし嵯峨の

さくげん和尚の、入唐あそばして後、信長公の、御

前にての物語に、りやうじゃせん、御池の蓮葉ハおよ

そ一枚が忒間四方ほどひらきて、此かほる風、心よく

葉の上に昼寝して、涼む人あると、語りたまへバ、信長

笑せ給へば、和尚御つきの間に立たまひ、泪を流し衣

の袖を、しほりたまふを見て、只今殿の御笑ひあそばし

けるを、口惜くおぼしめされけるかと、尋ね給へバ、和尚の

のたまひしハ、信長公天下を御しりあそばす程の、御心

入にハ、ちいさき事の思ハれ、泪を洒すと、のたまひけるとぞ

p 18

因果のぬけ穴

・
鐘持乗馬をひきつれて、家中にまたなき使者男、大

河半右衛門が風俗世に見ならへしといわれしに、武士の身程

定めがたき物ハなし、きのふ古里豊後の国より、文遣はし

けるを、女筆ころもとなく、明て見るに、兄嬢が書こし

ける、半兵衛殿事、此十七日の夜、妙福寺の碁会に、すこしの

助言より、いひあがりて、寺田弥平次うつて、はや所をたち
のき申、子もなき人の御事なれば、おのゝさまならで誰か
外にハ、たよりもなし、女の身の是非もなき仕合と、哀に
申遣ハしける、思案におよばず、俄に御暇申請一子の

p 19

判八ばかりつれて、武州を立出る、此弥平次ハ殿より御取

立の者なれば、深く隠して中々手にハマハるまじ、つ

ねゝ傳へ聞しハ但馬の国に親類ありとや、定めて

是へのくべし、我々も此所へ行て、心掛べしと、いそぎたじま

にくだりて、忍びゝにたずねけるに、あんのごとく、百姓の門

作りに、二重垣をして、牢人あまたかくまへ、用心の犬迄

何疋か夜ハ油断なく、拍子木をならし、間もなふ目を

覚しける、ある夜雨風はげしく、然も闇なれば、焼食

こしらへ、先犬どもにちかより、横手の塀を切ぬき、また内

なる壁に、道つけて広庭にしらび入しが、弥平次聞付

・
何者かといふ、親子ともに板のきれをくハへ、魚の骨の

ごとくにもてなし、犬のまねいたせしに、是を聞て犬にハ

あたまが高ひ、皆起あへとよばハる程に、兼ての若者ども、

おめき渡れど、まだ氣遣いをして、弥平次ハ出ず、けハしくな

れバ、此度ハのけと出さまに、鍋釜を提て、おもてに捨置

はじめのぬけ道に出るに、老人の（不）自由さハ、くゝり時隙人

處を、跡より大勢両足にとりつき、すこしも身のうごきな

らす、判八立帰りて、親の首を切、其くびさげて、にげのび

けるに、跡にてせんぎさま／＼、鍋釜のやうすを見て、盗人
にハうたがひなしと、其通りにすましける、其後判人ハ

p 20

我手に掛し親のくびを持って、入佐山の奥ふかく秋萩

の下葉を分て、世にハかゝるうきめもある事かな、かた

きハうたで、いかなる因果ぞかし、江戸にまします母の間

たまハ、我をふがひなく御なげきも深かるべし、されども

一念かけし、弥平次をうたてハ置まじ、御ころやすかれと、御

首に物を語りて、扱木の根をかへし、埋ミ所の穴をはり

しに、下よりしやれこうべひとつ出ける、是もいかなる

人の、むかしぞと、しらぬ哀れならべて、うづめ、露草を折

て水を手向、其日もまだ暮にとをけれバ、人の目を

しのび、夜入里に帰らん塚を枕にしばしまどろむうち

に、彼のしやれこうべ、つけて語るハ、我ハ判右衛門が、あさまし

き形也、我為とてかたきを打に来て汝が手にかゝる事ハ

是定る道理あり、前世にて弥平次が一門ゆへなき事に、八

人迄うしなひけれバ、天此科をゆるしたまぬを、今此身

になりて覚ゆる、其方とても是をのがれがたし、武勇

の本意をやめて墨染の身となりて、先立し、二人が跡を

よく／＼申ふべし、此言葉の証拠にハ、我形あるまじ、二一

たびほつて見るべしと、つげてうせける、彼塚をほるに、初

めのしやれこうべなき事不思議ながら、よもやうたで置べき

かと、心をつくせし甲斐なく、判人も又、かへり打にあいぬ

絵入り西鶴諸国はなし

四

(表紙)

p 1

近年諸国咄

大下馬

巻四

目録

① 形ハ昼のまね

執心

大坂の芝居にありし事

② 忍び扇の長歌

恋

江戸土器町カハラにありし事

③ 命に替る鼻先

天狗

高野山大門にありし事

④ 驚ハ三十七度

殺生

常陸の国鹿島にありし事

⑤ 夢に京より戻る

名草

泉州の堺にありし事

⑥ 力なしの大佛

大力

山城の国鳥羽にありし事

河内の国内助が淵にありし事

p 2

形八昼のまね

浄瑠璃の太夫に、井上播磨とて、さまのくふしを語り出して、諸人に口まねさせける、有時の正月芝居に、一の谷のさかおとしの合戦を五段につくり、人形もひとつく、細工人こゝろをつくしてこしらへ、役者もめい／＼の魂ひ入て、源平にし東にたて別れ、大軍の所をつかひけるほどに、大坂中うつして、是見事とて、ひさしくはやりける、其頃ハ二月の末の事なるに、明暮春雨のふりつゝき、萬の浜芝いまでやミて、物のさびしき夜半に千日寺の鉦の声、蛙の声より外ハさく事もなく、楽屋

番の小兵衛左右衛門、木枕をならべ、ともし火かすらにしてはなし寝入に、前後もしらぬ時、人のあし音に目覚し二人ともに夜着のしたより、あたまをあげて見るに、遣ひ捨たる人形ども、物こそいね、其まゝ人間のごとく立合しばしたゝきあい、くひつき、血煙たつておそろし、其後ににしの方より、越中の二郎兵衛と名付し、出来坊ゆたかに出れば、ひがしから、佐藤次信出て、是ハ半時ばかりも、きりむすびしが、つかれてあい引にして、つぎのぶハ腰をうって休む、二郎兵衛ハ、そろく庭におりて、天目ひしやくを取て

息つきの水呑ありさま、舌の音して、人にすこしも替

p 3

る事なし、其跡ハあつもりの、若衆人形にとりつき、またハおやま人形にしなだれ、色々の事ども、宵のこハさやミて

おかしくなりぬ、夜すがら二郎兵衛の人形、かけまわりける

が、明かたになりをやめける、楽屋番の二人おどろき、太夫本に

て是を語る、皆々横手うつ中に、四蔵といふ、ふるき道

外のありしが、すこしもさハがず、むかしより、同じ人形共

くひあふ事ハためし多いかにしても、水を呑し事

不思議なりと、あけの日、木戸番札売ども、大勢掛て

かつて見るに、年へし狸ども、ゆかの下より飛出て、今

宮の松原へうせにける、おそろしきとも中々

忍び扇の長哥

屋かた住ひ、気づまりも、上野の花にわすれて、諸人の

心玉うきたつ、春のありさま、衣装幕のうちにハ

小哥まじりの女中姿、ほんの桜よりハ、詠めぞかし、

日も暮にちかき折ふし、大名の奥さまめきて、先に長刀、ふたつ挟箱もたせて、高蒔絵の乗物つづきて、跡より甘あまりの面影、窓のすたれのひまより

見へけるに、其うつくしき、和国美人そろへのうちにもミへず、うか／＼と付てまはりける、此男やう／＼中小姓ぐらい

の風俗、女のすかぬ男也、おもふにおよばぬ、御かたを恋初こいぞめ

p 5

跡より行、中間にたづねしに、さる御大名のめいごさまと、あらまし様子を語りすて行、さてハと其所をしりて

奥かたへの、御奉公をかせぎしに、よき伝つてありて相済、二とせ

ばかり勤めしうちに、あなたこなたへの、御供申し折ふ

し、思ひ入し御乗物に、目をつけけるに、縁ハ不思議な

り、あなたにもいつともものふ、おぼしめし入れられ、すえ／＼の女に仰付られ、長屋の窓より黒骨の扇をなげ

入るゝ、若ひ者中間より見付て、彼半女かのはしたと、心のあるやう

に申を、沙汰なしに酒など買て、口をふさぎぬ、其夜御

あふぎひらき見るに、筆のあゆミ、只人のぶんがらにも

あらず、おぼしめす事ども、長哥にあそばしける

よく／＼読て見るに、我をおもハ、今宵のうちに

つれて立のくべし、男にさま替へて、きり戸をし

び、命をかぎりとの御事、此かたじけなき、身をくだ

きてもと思ひ定め、其時をまつに、御しませたがハズ、

小者姿にして御出あそばしけるを、御門をまきれ出

はやその夜に、かハラけ町といふ所に、よしミの者有

是にし

のび、すこしのうら棚をかりて、人しれず住けるに、何の心もなく、出たまへバ世を渡るべき、種もなければ

ば、御守まもりわきざしを少の質に置いて、月日をおくらる

p 6

るうちに、またかなしく男ハ夜／＼切疵のかうやくを

売れどもはかどらず、後にハせんがたつきぬれば、手なれ

たまハぬ、すゝぎせんたく、見るめもいたハしく、近所も

不思議を立ける、屋敷よりハ毎日五十人づゝ、御ゆくえ

をたづねしに、半年あまり過て、さがし出し、大勢とり

かけ、彼男ハ繩をかけて、其夜にせいばいにあいける、其

後姫ハ一間よるかたに出しこめ、じがいあそばすやうに、し

うけ置ても、中々その心ざしもなく、時節うつれば

いかに女なればとておくれたり、最後をいそがせと、大殿より

仰せければ、姫の御かたに参りて、世の定まり事とて

御いたハしくハ候へども、不義あそばし候へバ、御最後と申

あぐれば、我命おしむにハあらねども、身の上に不義ハなし

人間と生を請て女の男只一人持事、是作法也、あの者

下／＼を、おもふハ是縁の道也、おの／＼世の不思議といふ事を

しらずや、夫ある女の、外に男を思ひ、またハ死別れて、後

夫を求るこそ、不義とハ申べし、男なき女の、一生に一人の

男を、不儀とハ申されまじ、又下／＼を取あげ、縁をくミし

事ハむかしよりためし有、我すこしも不儀にハあらず、そ

の男ハ、ころすましき物をと、泪を流したまい、此男の

跡をふ為なりと、自髪をおろしたまふと也

p 7

命に替る鼻の先

天狗といふものハ、めいよ人の心に、おもふ事を其まゝに
合点をする物ぞかし、有時に高野の、おだはら町に

檜物細工ひものさいくをする者、杉の水さしまげる、折ふし十二三の

うつくしき女の子、何国ともなく来りぬ、是も此山にてハ
めつらしく、氣付て見るに、職人の見世のさきによりて、

鋏屑せんせつをなぶり、あたらすき相の木をきりてと、是を惜しみ

いろく、じゃまをするを、しかれどもきかず、後ハ心腹立

横矢よこやといふ道具をとりなをして、だましすまして

ぶたんと思へバ、はやしりて、それでうたるゝ間にハ、我も

p 8

足があつて、にぐるといふ、砥石なげうちにとおもへば

いやくなげうちハすかぬ事と笑ふ、あきれはて、分別

するうちに、割挟のせめといふ物、自然とはずれけり、是

ハ心の外なれば、鼻の先にあたれば、おどろき姿を

引替へ、天狗となつて、山に飛行、あまたのけんぞくを

集め、さてもく世の中に、檜物屋程おそろしき物ハなし

かさねて行事ゆくなかれ、思へバにくし、けふのうちに、此御

山を焼拂ひ、細工人めをはだかになすべしと、火の付所を

手わけして、既に申の刻にきハめける、折からほうき院ハ

昼寝をしますが、此声に夢覚、当山やくべきと

..

ハかなしく、我一山の身にかハリ、まごうへ落て、あのせいとミ

をすべしと一念あかりしやうじ二枚、両脇にはさまれしが

そのまゝ羽となつて飛れける、弟子坊主台所に、何か
もりかたをして、ありしが、是もつづきて飛ける、今に其時
の形をあらハし、大門のしやくし天狗とて、見る事たび
く也、其後不思議なる事ハ其寺のかぶき門、数百人
しても、うごくまじきを、ある夜やね計を、海道にお
ろし置ぬ、それより人絶て、此寺天狗の住所となり
て、ひさしくうちを見た人もなし

p 19 ..

驚ハ三十七度

物ハ仕入によつて何事も、近年関東のかたに、友よび鷹たか

といふ物をこしらへ、広野にはなちがひして置しに、空

行鳥をよびおろし、さまくなつて、後ハせつしやう人

の、宿につれて来て、骨をもおらず、とらへさず事有、

諸鳥迄も、かく奥筋ハすどし、爰にひたちの国

鹿島のかた里に、目玉の林内といふ者、世を渡る業

もおゝきに、冬の夜のあらしをもいとハず、あたりの若

者をかたらひ、明暮鳥の命をとる事かぎりもなし、

つれそふ女房ハ、やさくしも此事とまれと、異見する事

p 20

たびくなれどもやめず、是をかなしく、独ねらぬまゝに、世の

無常をぐハんずる時、寝させ置きたる、二人の子共、現に声

をあげて、びくく身のうごく事、三十七度也、次第おそ

ろしくなつて、男を待兼るに、夜更て、門をたゝき、やれ

今宵は、仕合といふ、女泪を流し、幾程うき世にあるべき

ぞ、むくいの程をしりたまへ、今夜の鳥の数三十七羽あるべし、

中鳥八羽大鳥三羽と申、籠をあけて見るに、しめ鳥

数違はずバ、林内横手をうつ、宵より子どもが、おどろく
ありさまを語れば、身ふるいして、是より萬の道具を
塚につき、色々くやうなし、今に鳥塚とて残れり

p 11

夢に京を戻る

桜鯛さくら貝、春の名残の地引、堺の浦に、朝とくかよふ
魚売ども、目籠を荷ひつれて行に、大道筋の、柳の
町とおもふ時、うつくしき女郎のたよ／＼として、しほれし藤
をかざし、人をもつれず、只ひとり、先に立て行、いづれも
さかんの、若ひ者どもなれど、あまりあきれて、言葉をも
えかけず、現のやうに、心玉をとられ行に、此女朱座の門
に立、またハ両替屋のおもてに立、戸の明ぬを、うらめし
そふに見へける、さてはいたづらものにハ、うたがひなし、いま
だ夜もあけぬ、たのしみに、南のはしの、小宿にさそひゆ

p 12

かんと、無分別をおもひ立、我も／＼とちかより、夜のおひ
とりハ心元なし、何かたへなりとも、おくりとどけてまいら
すべし、其花一枝、たまハれと申せば我くるしむも是
ゆへなり、藤にハ春の雨風をだにいとひしに、ましてや
人の手して、折事のなさけなし、昼見らるゝさへ、惜きに、見
ぬ人の為とて、折て帰りし人の、妻や娘のにくさに、かく
取かへしにありくと、いふかとおもへバ、いつともなふ、影消て
なかり、皆々不思議と、所の人に此事をかたれ
バ、おもひありし、物語のあり、むかし後小松院の御時、此里金光
寺の、白藤たぐひなき、花房をきこしめしおよばれて

..

藤を都にうつされ南殿の大庭にうへさせられし
に、春ふかくなれども、花の咲かぬ事をくやませ給ふに、あ
る夜藤のせい、御枕の夢にあらハれて、まぎ／＼と読ぬ、
おもひきや堺の浦のふじ浪の、都の松にかゝるべきとハと
見へければ、こたび此所へ、おくりかへさせ給うふと傳へし也、
もしもさやうの事かと、夜明ておの／＼、金光寺に行
て見るに、あんのごとく、見物おりてかへりし、花どものこ
らず、もとの棚にあがりし、さてハ名木名草のきどく
とて、其後ハ下葉一枚あだになさじと也

p 13

力なしの大佛 ちからなしのあふほとけ

長崎半左衛門が、ひしやくの曲づくしを、めいよとおもへバ、京の
こびき町に、若ひものども集りて、たばね木山のごとく
つみかさね、下よりハ三間高し上より茶が呑ミたいと
とよめバ、天目に入れながらなぐる、すこしもこぼさず取
事、幾度にもあぶなからず、また近江の湖にて
白髭の岩飛、よし野の滝おとし、是皆れんま也
飛鳥井殿のえぼしづけの鞠を見て、油売一升はかり
て、銭の穴より、雫も外へもらさず、通しけるとや、たと
へば、無筆なる者、将棋の駒書に同じと、巧者なる

p 14

人の申傳へし、其頃下鳥羽の、車つかひに大佛の孫七
とて、その生れつき、千人にもすぐれて、都かよひに、東
寺あたりの、小家へハはいる事を、あたまつかへて、めいわく
す、されども、すこしも力なくて、達者事にひけをとる
事たび／＼也、壱斗のおもめ、片手にてハあがらず、世間の
笑ひものぞかし、此里の若者、一石式斗を中ざし

にする者あまた也、大仏一代、むねんにおもふうちに
男子ひとり、もふけぬるに、おとなしくなる事を、

まちなね、はや取立の時分より、六尺三寸の棒を持

ならハせ、三歳の時ハはや一斗の米をあぐる、それより

・

段々仕込、八歳の春の頃、手なれし牛の子をうミ

けるに、荒神の宮めぐりをすぎて、やうくうしの子も

かたまり我と草村にかけまはるを、とらへてはじめ

て、かたげさせけるに、何の子細もなく持ければ、毎日

三度づゝかたげしに、次第にうしハ、車引ほどにな

れども、そもくより持つづけぬれば、九歳時もとらへて、

中ざしにするを見るに人興を覚しぬ、後ハ親仁にハ

かハリ、らくちう、らくぐハいの大力、十五歳より、鳥羽の小

佛とぞ、名乗ける

p 15

・

鯉のちらし紋

川魚ハ淀を名物といへども、河内の国の、内助が淵のざこ

迄も、すぐれて見へける、此池むかしより今に、水のかわく事

なし、此堤にひとつ家をつくりて、笹舟にさほさして、内

介といふ獵師、妻子も持ずただひとり、世を暮しける

つねく取溜し、鯉の中に女魚なれどもりしく、慥に

目見しるしあつて、それ計を売残して置に、いつのま

かハ、鱗にひとつ巴出来て、名を巴とよべバ、人のごとくに

聞わけて、自然となつき、後にハ水をはなれて、一夜
も家のうちに寝させ、後にハめしをもくひ習ひ、また

p 16

手池にはなち置、はや年月をかさぬ、十八年になれば、

尾かしら掛て、十四五なる娘のせい程になりぬ、あるとき

内助に、あハせの事ありて、同じ里より、年かまへなる女

房を持しに、内介ハ獵船に出しに、其夜の留守にうるハし

き女の、水色の着物に、立浪のつきしを上掛、うらの

口よりかけ込、我ハ内助殿とハ、ひさくのなしミにして、

かく腹にハ、子もある中なるに、またぞろや、こなたを

むかへ給ふ、此うらミやむ事なし、いそひで親里へ歸りた

まへ、さもなくバ、三日のうちに、大浪をうたせ、此家をその

まゝ、池に深めんと申捨て、行方しれず、妻ハ内介を待

・

かね、おそろしきはしめを語れば、さらく身に覚のない

事也、大方其方も、合点して見よ、此あさましき内助

に、さやうの美人、なびき申べきや、もし在郷まハりの、紅や

針売のかくにハおもひあたる事もあり、それも当座

くすましければ、別の事なし、何かまぼろしに見へつ

らんと、又夕暮より、舟さして出るに、俄にさゝ浪立て

すさまじく、浮藻中より、大鯉ふねに飛のり、口より

子の形なる物をはき出しうせける、やうくにげかえりて

いけすを見るに、彼鯉ハなし惣して生類を、ふかくてな

付る事なかれと、其里人の語りぬ

卷ノ四 了

絵入り西鶴諸国はなし

五

(表紙)

p 1

近年諸国咄

大下馬 卷五

目録

① 提灯に朝顔

茶湯

大和の国春日の里にありし事

② 恋の出見世

美人

江戸の麴町にありし事

③ 樂のまこの手

生類

ま・魚偏に摩

こ・魚偏に古

鎌倉の金沢にありし事

⋮

④ 闇の手形

横道

木曾の海道にありし事

⑤ 執心の息筋

幽霊

奥州南部にありし事

⑥ 身を捨る油壺

後家

p 2

提灯に朝顔

野ハ菊萩咲て、秋のけしき程しめやかにおもしろ
き事ハなし、心ある人ハ哥こそ、和国の風俗なれ、何
によらず、花車の道こそ一興なれ、奈良の都のひかし
町に、しほらしく住なして、明暮茶湯に身をなし
興福寺の花の水をくませ、かくれもなき、樂助なり
ある時此里の、こざかしき者ども、朝顔の茶の湯を
のぞみしに、兼々日を約束して萬にこころを付て
その朝七つよりこしらへ、此客を待に、大かた時分こそ
あれ、昼前に来て、案内をいふ、亭主腹立して

⋮

客を露路に入てから、提灯をともして、むかひに出る
に、きやくハまだ、合点ゆかず、夜のあし元するこそ、お
かしけれ、あるじおもしろがらねバ、花入に土つきたる、芋
の葉を生て見すれども、其通り也、兎角こころへぬ人にハ
心得あるべし亭主も客も心ひとつの教寄人にあら
ずしてハ、たのしみもかくる也、むかし功者なる茶湯を
出されるに、庭のそうじもなく、梢こずえの秋のけしきを、そ
のまゝにしておかれしに、客もはや心を付て、いかさま
めつらしき、道具出べきとおもふに、あんのごとく、掛物に
八重やへむくろ葎しげれる宿の古歌をかけられける、また

p 3

ある人に、漢の茶湯を望ミしに諸道具、皆から物を
かざれしに、掛物ばかりあべの仲麻呂が讀し、天の原

ふりさけ見れば春日なる、三笠の山に出し月かも
の哥を掛られたり、いづれもかんずるに、此うたハ
中丸、もろこしから古里をおもふて、読し哥
なりと、しばらく亭主の、作の程を詠めけると
なり、客もかゝる人こそ、此道をすかるゝ甲斐あれ
と、ある人の語りし

p 4 ..

恋の出見世

安部茶問屋あべちやといやして、江戸麴町によろしき者あり、年ひさ
しく遣みひし若わかひものに、長兵衛と申て、たまかに商の

道精みちせいに人ければ、親かた次第にふつきになりぬ、はや年
もあけば、下町に見世を出せ、国元より母親をよびよせ
うしろミさせて、よき商人にしたてける、いまだ定まる
妻なければ、あなたこなたと聞き立ける、折ふしハ極月
のはじめつかた、世間せハしき時分に、素紙すかみこ子ひとつに、深

編笠着たる男、明てより暮迄四五度門を通り

茶棚を見入、しばし立とゝまるを、亭主もこころへ

p 5

ず、近所のもものも、気を付て、是ハねだれ者也、油断し
たまふなど申處へ、また彼男来たつて、内に入長兵衛殿と
申ハ、こなたの事か、すこしの御無心に、まいつたと申せば
此方も世滞の取付にて、御用に立程の事ハなるまじ
少しの御合力ハやすき御事と申、あたりの人勝手にまはりて
様子を聞に、彼牢人の申ハ、御心入かたじけなし、我等の望

ミさやうの義にハあらず母親のなき娘ひとり持しが我
子ながら、さのミハイやしからず、そのかた心入、兼て聞および
候へバ、是非に婿になりて、たまわれと頼む、それがし
旦那もあれば、内談申てのうへに、御返事と申せば、それ迄
..

間のなき事ぞ、申掛かかて合点まいらすバ、是迄の命申し

おもひ切を、いづれも出合、爰ハ何とぞあるべし、我々に御ま
かせあれと申うちに、乗物長持かき入ける、此娘の美人

東あづまに見た事もない姿、おのゝおどろきける、紙子袖より

小判五百両取出し、是ハむすめの遣みひ金也、刀脇指ハ、ひき
出物也、今日より世に親ありとおもふなど、いふ声の下より
髪を切れバ、門より法師の、おそひとよび立、行方しらず
なりぬ、其後いろゝ子細をたづねけれども、泪にくれて
名もなき者の、娘也と計、かさねて物をも申されず、此
事申あげけるに、其通り済ぬ

p 6 ..

楽たのしみのまじの手

ま・・魚偏に摩

こ・・魚偏に古

鎌倉の金沢といふ所に、流田坊と申て、世をのがれける
出家あり、今ハ佛の道も、ふかく願ハず、明暮丹後ぶしの
道行ばかりを語りて、柴の網戸を引立、軒の松がえ
に、薦の葉のかゝりて、紅葉するを見て秋をしる、浪の

月心をすまし、雁のワたるを琴に聞なし、只夢のやう

に、日をおくりぬ、たくハへる物もなければ、露時雨の折ふ

しハ、煙を立る爪木もなし、萬其通りにして、死

次第と、身を極めたまふ折から、入江にさゝ浪たつて、見なれぬ、いきもの式疋、人におそれず近寄を、よく見れば

p 7

まこといふもの也、一疋ハ流れ木を、ひろひ集めて抱へ

また一疋ハ、ほし肴を持って、物いハぬ計、人間のごとく、かしら

をさげて居、此心ざし嬉しく、精進をやぶりて、是くひ

ける、其後ハ手馴て、淋しきとおもふ時にハ、かならず来て

よき友となりぬ、ことにたのしみハ、身のうちのかゆさ、云

ねど、自然としりて、思ふ所へ手をさしのべ、其ころよ

き事、命も長かるべし、今世上にいふ、孫の手とハ是

なるべし、次第になじみけるに、ひとつばかり来て、一疋

ハ、ひさしく見えぬ事をなげき、もしも命のおハリ

けるかと申せば笑ふて沖のかたに指さす、いよ合点

..

ゆかず、それより百日程すぎて、またはじめごとく、式疋つ

れて、夜半にきたる、戸ざしを明れば、なつかしそふに近

くよる、何として此程ハ、見へぬぞとあれば、紫の衣をたゝ

ミながらさし出す、心をとめて見るに、正しく我古里に

まします、伊勢の大淀の、上人円山の御ころもなるが、さて

もく不思議也、何とて物をいハぬぞ、此事きゝたしと、いろく

おもふ甲斐なく、日数ふりしうちに、国元よりのたよりに

円山御せんげのよし、しらせける、すえの世のかたりくに

彼御衣を持って、伊勢御寺にのほりぬ、それより此

所を、衣の磯とぞ申けるとかや

p 8

闇の手形 くらがりのてがた

美女ハ身の敵と、むかしより申傳へし、おもひあたる事

ぞかし、今川采女と申人、生国越後にて、段々義理につ

まつて、人をうつてのきしに、親類のなき事、かやうの

時の、よろこびなりしに、なげきあり、此二とせあまり

あいなれし女、此別れをかなしミ、何国迄もと、袖にす

がれば、是非なくつれて、只式人山越に立のき、やうくと

あぶなき国元をはなれ、信濃路にさしかゝりて

行に、追分よりから尻をいそがせぬれど、此所ハ女房

馬かたにてはかとらず、心ざしぬる宿迄、日の暮け

p 9

れば、定まりの泊り、外なる野はづれの、ひとつ家の

つねハ、旅人をとめた事もなき、あるじにさまく詫言

して、情の一夜を明すに、嵐のはげしく、はや此里

ハ九月の末つ方より、雪ふり初、寒さもひとしほま

されど、しのぐべき着替もなく、木曾の麻衣のひとへ

なるかさね、夜もすがら焼火して、いかき茶といふ物

を吞より、外のたのしみなし、世のうきねんぐのたらぬ事、牛が一疋ほしきなど、咄し寝入に、ゆるりの松がり消て、駢ばかりなりぬ、其頃きその赤鬼、あざ名をよび、あばれ者のありしが、くみする若者、あま

たあつめて、内談するハけふのくれかたに、やしき女をつれて、旅の者の通りしが、さてもく其姿、何とも言葉にハのべがたし、見そむるより、無理ハおぼへて恋となり、命に替てともおもふなり、幸今宵ハ

宿はづれにとまれバ、おのくが力を添、此おもひを晴さしてくれよと、鬼の目にも涙を流して頼む、無分別さかりの若者、それハ手に入たる女也、さらバ皆々形をか

へよと、いろくづきんに顔かくして、彼のかり宿、門かどに行て

大勢声を立て、人足出せとよべバ、亭主かけ出るをとつてしめ、彼男をはじめ、家内残らす繩をかけ置

p 10

火うちのひかりに、女を見付、さまく我まゝしてにげて行、おもひよらざる事、是非かなハぬ難儀に

あい、夜の明るを待兼、奉行へ御訴訟申あくるに、なにもとらぬ事の、不思議也、ひとりも見しらねバ、何を以て、せんさくの種もなしと、仰せける、其時それがし

覚の候へバ、此宿中男残らず、御前へと申あぐる、一人ものこらずめされける、女罷出、此の内に、二三人も、背中に鍋炭の手形あるべしと、かたをぬがしてせんさくするに、あらハれて

此中間十八人、せいばいあそばしける、扱もせハしき中に

女の知恵をほめける、是迄の因果と、夫婦指違へける

p 11

執心の息筋

継子まも生長しては、掛る物なるに、むかしより世界の人心

是をにくむ事替らず、南部の町に、仙台屋宇右衛門と申て所ひさしき、くるがねの商人あり、仕合よろず何のふそくもなく、男子ばかり、三人迄持しに、世の無常とて、なしみに別れ、万事をうち捨しに、語

る人く、世間をやめさせず、押付わざに、また妻を寄せけるに、何に付ても、おもハしからねど、かんにんして、はや五年あまりもすぎける、宇右衛門もながくわづらひて、今ハうき世のかぎりの時、のちづまを、枕ち

p 12

かくよびよせ、我相果し後、また浮世を立たまへ

ば、それがし息のかよふ内に、何にてもほしき物を、とつてのきたまへといふ、女泪に袖をしたし、かさねて夫を

持べきやと、黒髪を切ば、扱ハたのしきと、三人の子どももあづけ、萬のたからを渡し、今ハ思ひ残する事もなく

むなしくなりぬ、いまだ三十五日もたぬに、子ども二人すき行ば、人もふしぎを立ける、十九歳になる兄むす

こにも、後程つらくあたれバ、ぶらくとわづらひつきて、養生ためとて、遠く借座敷に出けるに、万事かつく

にあてかへバ、かなしき様子申せと、ある物をやらす、やうく

年も暮ちかし、銭かねも取集めたらバ、遣ハし

申すべしといふ、けふさへおくり兼しに、口惜をしきしかたと、思ひ極め、一言申残すハ、我是迄くる道にて、雪にあいし人ありて、我傘の下へ頼むといふ程に、我宿ハ是より、一里あまり有、それ迄行てから、持してかすべしと申せば、其間にハぬるゝと申たと、是を最後の言葉にてすぎ行、今ハ我物と、むかしのごとく、継母髪をのバし、いたづらを立、世にさかゆる時、まゝ子の幽霊来たつて、軒端より、息吹かくるに、母のかしらにくハえん燃付、いろ／＼けしてもとまらず、形も残ずなりぬ

身を捨て油壺

ひとりすぎ程、世にかなしき物ハなし、河内の国平岡の里に、むかしハよしある人の娘、かたちも人にすぐれて、山家の花と、所の小哥にうとふ程の女也いかなる因果にや、あいなれし男、十一人迄、あハゆきの消ゆるごとく、むなしくなれば、はじめ恋れたる里人も後ハおそれて、言葉もかハさず、十八の冬より、おのづから後家立て、八十八になりぬ、さても長生ハ、つれなし、以前の姿引替、かしらに霜をいただき、見るもおそろしげなれども、死れぬ命なれば、世をわたるかせぎ

p 14

に木綿の糸をつむぎしに、松火もとけなく、ともし油にことをかき、夜更で、明神の灯明を盗ミて、たよりとす、神主集り、毎夜／＼御ともし火の消る事を不思議におもひつるに、油のなき事、いかなる犬けだものしハさぞかし、かたじけなくも御社の御灯ハ、河州一國

照させたまふに、宮守どものぶさたにもなる事也、是非に今宵ハ付出し申すべしと、内談かため、弓長刀をひらめかし、思ひ／＼の立出にてないじんに忍び込、この様子を見るに、世間の人しづまって夜半の鐘のなる時、おそろしげなる、山姥御神前にあがれば、いづれも

氣をうしなひける、中にも弓の上手あつて、かりまたをひつくハへ、ねらひすましてはなちければ、彼姥が細首おとしけるに、そのまゝ火を吹出し、天にあがりぬ、夜あけてよく／＼見れば此里の名主姥也是を見て、ひとりもふびんといふ人なし、それよりも、よな／＼出て、往来の人の、心玉をうしなハしける、かならず此火に、かたをこされて、三年といきのびし者ハなし、今五里三里の、野に出けるが、一理を飛ける事目ふる間もなし、ちかく寄時に、油さしといふと、たちまちに消る事のおかし

p 15

銀が落るある かねがおとしてある

物毎正直なる人ハ、天も見捨てたまはず、難波人ひさしく、江戸に棚出して、一代世をワたる程もふけて、二たび大坂にかへり、楽々と暮されける、折ふし秋の草花などいけて、詠める時、ひかしの山里より、紅草のうるハしきを、おくりける折から、あたりの男きたりて、何ぞといふ程に、せいじんの世にはへる、れいしといふ物と語れば、ありがたそふに、手にも取ず見物する、律義者也、けふ御見舞申ハ、私も爰元のしんだいおもハしからず、一たび江戸への心ざし也、こなたにハ、数年にて

勝手も御そんじなれば、今時ハ何商がよいと申、今ハ銀
ひろふ事か、またもよいと申せば此男まことにして、是
ハ人の氣のつかぬ事也、御影にて是非に拾ふて、まいろふ
といふ程に、はおかしく、道中の遣ひ銭もとらし、其元
へかせぎにくだる者也、万事頼のよし、念頃なるかたへ状
を添ける、頓てくだりつきて、彼人宿の亭主になつて

令和3年10月 翻刻ス わりいし

あけの日、もも引ききやはんして出、日暮てかへる事十日計
なり、亭主心元なく、毎日何方へゆかるゝぞ、身ずぎの内
談もなされずといふ、此男さゝやきて、あるじさまへハかく
すまじ、それがしハ爰元へ、銀をひろひにまいつたと申

..

亭主腹をかゝへ、また大坂から、此男をなぶつて、くだし
けるとおもひ、扱日にく出られて、拾わるゝかと申せば、爰
元へまいつて、昨日ばかりが不仕合、その外ハひろひました、ある
ひハ、五匁七匁、先おれの小刀、またハ秤のおもり、かたし目貫
何やかや取集て、四百色程ひろひける、亭主きもを

つぶして珍敷めづらしいお客と近所の衆に語れば、是ためしもなき

事也、はるく正直にくだる心ざし、咄の種にひろハせ
よと、小判五両出し合、ひろハせへる、それより次第に、ふつきと
なつて、通り町に屋敷を求め棟にむね門松を立
広き御江戸の、正月をかさねける

貞享二年 丑正月吉日

大坂伏見呉服町真斎橋筋角

池田屋三郎右衛門開板